

■ 追 悼 ■



佐野圭司 先生

ご略歴・ご業績

■ご略歴

1920年 6月30日 静岡県富士宮市に生まれる
 1945年 東京帝国大学医学部医学科卒業
 同年 東京帝国大学医学部副手第1外科入局
 1951年 米国留学 (UCSF)
 1952年 東京大学助手
 1956年 東京大学講師
 1957年 東京大学助教授
 1962年 東京大学教授(脳神経外科学講座の初代教授)
 1981年 東京大学名誉教授
 同年 帝京大学医学部脳神経外科主任教授
 同年 富士脳障害研究所附属病院理事長兼病院長
 1985年 帝京大学大学院医学研究科長
 1988年 帝京大学医学部客員教授
 1993年 日本脳神経財団理事長
 2005年 富士脳障害研究所附属病院名誉院長・理事
 2006年 東京脳神経センター所長

■ご業績

1965年 第24回日本脳神経外科学会会長
 1966年 日本定位脳手術研究会会長
 1967年 アジア・オーストラリア州脳神経外科学会会長
 1968年 第17回総合医学賞
 1969年 1969～1973年 World Federation of Neurosurgical Societies 会長
 1971年 アジア・オーストラリア州脳神経外科学会名誉会長

1972年 International Society of Psychiatric Surgery 名誉会長
 同年 第21回総合医学賞
 1973年 第3回脳卒中の外科研究会会長
 同年 第5回国際脳神経外科学会会長
 同年 World Federation of Neurosurgical Societies 終身名誉会長
 1974年 第3回脳卒中の外科研究会会長
 1975～1979年 日本交通科学協議会会長
 1978～1983年 日本脳神経 CT 研究会会長
 1980～1981年 下垂体腫瘍 Workshop 会長
 1980年 第3回 Wilder Penfield Memorial Conference 会長
 1981年 日本脳神経外科コンgres 会長
 同年 第4回日本神経外傷研究会会長
 同年 The United States-Japan Conference on Brain Tumor Therapy 会長
 1985～1986年 Academia Eurasiana Neurochirurgica 会長
 1985～1991年 第13期, 14期日本学術会議会員
 1988年 紫綬褒章
 1990年 International Conference on Cerebral Vasospasm-1990 会長
 同年 名誉学位 (Universität des Saarlands, Germany)
 1994年 勲三等旭日中綬章
 2010年 日本脳神経外科学会齋藤眞賞特別功労賞

佐野圭司先生を偲ぶ

富士脳障害研究所附属病院院長

田村 晃

東京大学脳神経外科名誉教授 佐野圭司先生におかれましては、2011年1月6日に肺炎のためご逝去(享年90歳)されました。ここに先生の御遺徳を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は日本の脳神経外科のパイオニアとして脳神経外科の発展に尽くされたのみならず、脳・神経領域の基礎・臨床において多大の貢献をされ、本邦のみならず国際的にも高い評価を受けておられました。また、本誌の前身である『脳と神経』には1948年の発刊当初から関わっておられました。

先生は1920年6月30日静岡県富士宮市にお生まれになり、1942年に旧制静岡高等学校から東京帝国大学医学部にご入学されました。折しも太平洋戦争の最中で、先生のお言葉によれば「土日もない詰め込みの速成教育」を受けられ、1945年ご卒業と同時に海軍に応召され伊豆半島先端の湊海軍病院にて診療に当たられました。

終戦後は東京大学に戻られ、「坂口内科に行くか大槻外科に行くか迷ったが、父が外科医だったので大槻外科に入った。当時は脳に興味を持つどころではなかったが、大槻菊男教授から大学院特別研究生にするから脳神経外科をやれと命ぜられ、脳神経外科をやることになった」とおっしゃっておられました。東京大学では清水健太郎助教授と脳血管撮影や「脈無し病(高安病)」の研究に従事され、「椎骨動脈注射」(経皮的椎骨動脈撮影法)により医学博士の学位を授与されました。

1951年GARFIOA基金による文部省渡米留学生としてカリフォルニア大学(サンフランシスコ)のNaffziger教授の下に留学されました。サンフランシスコでは手術見学など臨床研修を行うと同時に神経病理のMalamud教授の下で「てんかん脳の病理学的研究」をされ、詳細に病歴と照らし合わせて側頭葉のアンモン角硬化と側頭葉てんかん(psychomotor epilepsyあるいはictal automatism)の相関を明示した最初の論文を『A. M. A.

Archives of Neurology and Psychiatry』に1953年に発表されました。同じ年モントリオール(Penfield)らは側頭葉てんかんの病因として最も頻度の高いものはテント切痕ヘルニアによるincisural sclerosisであると発表していますが、後年Sano & Malamudの研究の正しさが認められ、現在も行われている側頭葉てんかんの外科治療の礎となっています。

その後、北米各地を回られてメイヨアのMacCarty、シカゴのBailey、ボストンのSweetやPoppen、モントリオールのPenfieldなどの手術を見学し、ボルチモアではWalkerと親交を結ばれました。敗戦国からの留学生を温かく迎えてくれた北米の有名な脳神経外科医たちの態度から、先生は常に「偉い人は親切なんです」とおっしゃって、ご自分でも見習われて内外の若い訪問者に親切に対応されていらっしゃいました。

ご帰国後は清水健太郎教授が主宰される東京大学第一外科の講師、助教授として揺籃期にある日本の脳神経外科の教育、研究、診療にあたられるとともに、国内外の学会で多くの成果を発表されました。1962年には教授に就任され、わが国で初めての脳・神経外科学講座(当初は外科学第三講座)を担当し、脳神経外科学の発展に努めるとともに、脳神経外科を標榜科として認めてもらうべく医療法の改正に向けて各方面に働きかけられ1965年に実現されました。

研究・臨床面では、当初は脳波とてんかんの研究、Marcus Gunn現象のような連合運動異常の研究をされておられましたが、その後、てんかんや不随意運動・頑痛などに対する機能的脳神経外科治療、グリオーマに対するBAR療法や原子炉治療、松果体腫瘍の手術および病理学的研究などの脳腫瘍研究、頭部外傷の研究など幅広い研究をご指導され、くも膜下出血や脳虚血をはじめとする脳卒中の研究も手がけられました。また、1969年には手術用顕微鏡をいち早く導入され、ご自身もスイス

の Yasargil 教授の講習会に参加され、日本におけるマイクロサージェリーの礎を築られました。

1948 年に日本脳神経外科学会の前身である日本脳神経外科研究会が創立されましたが、当初から斉藤眞教授や清水健太郎助教授を補佐されて奔走され、その後の発展に多大な貢献をされました。日本脳神経外科学会や日本脳神経外科コンgres、アジア・オーストラリア州脳神経外科学会、欧亜脳神経外科アカデミーなど多くの国内外の学会を主催され、1973 年には開会式に当時の皇太子殿下と美智子妃殿下のご来臨を仰いで第 5 回国際脳神経外科学会を東京で開催されました。先生は、これらの業績を評価され 1988 年 11 月 3 日に紫綬褒章、1994 年 4 月 29 日には勲三等旭日中綬章を受章されました。

1981 年東京大学をご退官、名誉教授となられ、帝京大学医学部教授兼救命救急脳神経外科センター所長に就任されました。また、先生の郷里である富士宮市に前年に創設された富士脳障害研究所附属病院理事長に就任されました。帝京大学においても、教育・臨床の傍らライフワークである海馬の研究や松果体腫瘍の発生に関する研究など幅広く手がけられました。常に『Trends in Neuroscience』や『Nature』、『Science』などの新しい文献に目を通され、分子生物学的な知識も掌中に収められ、最新の知識が盛り込まれた論文を、すべてご自身でお書きになっておられました。

学会などの講演に際しても最新の論文をお読みになり、スライド原稿などもご自身で作っておられました。先生の手書きの図などは、多くの論文やご著書などにも掲載されておりますが、実に正確でわかりやすく暖かみを感じられます。松果体腫瘍の発生に関する新しい考えを“Pathogenesis of intracranial germ cell tumors reconsidered”として『Journal of Neurosurgery』誌上に発表されたのは 1999 年、傘寿間近のときで、私ども弟子達は無言の叱咤激励を受けております。

先生の下からは 200 名以上の脳神経外科医が巣立って

おりますが、先生は「“天地にまかせて種をまきおけばいつか花見る人もあるらむ（木下尚江、1869-1937）” 私は東京大学の教授時代も、それに続く帝京大学時代も大体この方針で教室の運営をやって来た」とお書きになっております。30 年以上前に東北大学の鈴木二郎教授が佐野先生ほかを招かれて脳動脈瘤手術のライブを企画されたことがあります。その折「先生に動脈瘤がみつかった場合に誰に手術をしてもらいますか？」という質問に対して、先生は「自分の弟子であれば誰でも」とお答えになったということです。

先生は、文学や歴史にもご造詣が深く、外国での講演やスピーチでもゲーテやシェイクスピア、日本の短歌や俳句を引用され、欧米の方々に絶賛され敬意をも抱かせておられ、ドイツでは“Goethe-kenner”（ゲーテ通）と呼ばれていたということです。『American College of Surgeons』の editorial advisor であった Harken の「外科医には職人芸のみならず cultural background も必要である」という言葉をよく引用されておられました。

先生はご壮健であられました。この数年は腰痛などもあり体調を崩されておられましたが、「生涯患者さんとともに」というご信念で直前まで外来診療を続けておられました。

1982 年に米国の脳神経外科コンgresの Honored Guest に選ばれ渡米した際にアンドロメダ座の星 (RA1h43m20sd33°28') に Keiji Sano と命名されるという栄誉を受けたと嬉しそうにお話ししていらっしゃいました。先生が亡くなられた日、鎌のような三日月が赫く染まった愛鷹山に懸かり、夕星が光っておりました。先生はご自分の名前がつけられた星へと旅立って行かれたのでしょうか。

先生の教えは多くの門下生のみならず、この分野の医師・研究者たちに末永く受け継がれていくものと信じております。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

合掌